

ハタハタ漁況予測手法の開発

三浦太智

目的

ハタハタは青森県日本海沿岸において冬場の重要な漁獲対象種であり、漁獲のほとんどを12月に沿岸へと来遊する産卵群が占めている。しかし、漁獲量の年変動が大きい魚種であることから漁期前に漁況を予測する手法を開発する。

材料と方法

1. 未成魚分布調査

重要魚類資源モニタリング調査（P6-18）と資源評価調査委託事業（ハタハタ）（P54-63）により、平成29年4月-7月に日本海海域の14調査地点（図1）において行った、試験船青鵬丸（65トン）のオッタートロール網操業結果を用いて、未成魚（0歳魚、1歳魚）の分布密度を求めた。曳網距離は網の着底から離底までの距離とし、北川ら¹⁾の方法により求めた。曳網面積は曳網距離に袖網間隔を乗じて求めた。0歳魚、1歳魚それぞれの平均密度を調査年別に求め、増減を比較した。なお、平均密度の算出の際、ハタハタの採捕が見られなかった地点は除外した。また、平成29年に漁獲したハタハタの年齢は、体長組成（P54-63）から、体長70mm未満を0歳魚、70mm以上-115mm未満を1歳魚、115mm以上を2歳魚以上とした。

2. 漁獲動向調査

青森県日本海沿岸各漁協、支所が集計したハタハタ漁獲量を月別、銘柄別に集計した。また、本県と同じ日本海北部系群を漁獲する秋田、山形、新潟の3県の漁獲量は、我が国周辺水域の漁業資源評価²⁾の数値を用いた。

3. 漁況予測

ハタハタの漁況予測として、本県海域への来遊資源量、年齢構成及び初漁日を予測した。

(1) 来遊資源量および年齢構成

平成12年-平成28年までの雌雄別年齢別漁獲尾数を用い、VPA（Virtual Population Analysis）³⁾によって青森県のハタハタ雌雄別年齢別資源尾数を推定し、各年齢の平均体重を乗じて年齢別資源量を推定した。なお、ハタハタの年齢は漁獲物の雌雄別体長組成（P54-63）に見られるモードを基に、切断法によって1歳魚、2歳魚および3歳以上のプラスグループとし、自然死亡係数は田内・田中の式⁴⁾にハタハタの寿命とされる5歳²⁾をあてはめて求めた0.5とした。漁獲係数について、2歳と3歳以上は同じとし、最近年の漁獲係数を過去3ヵ年における同一年齢の漁獲係数の平均値と仮定し、この仮定を達成する最近年における2歳の漁獲係数をMicrosoft Excelのソルバーを用いて探索的に求めた。翌漁期の雌雄別年齢別来遊資源量については、前進法により2歳魚、3歳以上の資源尾数を、未成魚分布調査の1歳魚分布密度と、VPAで推定した1歳魚資源尾数との関係式から1歳魚資源尾数をそれぞれ推定し、各年齢の平均体重を乗じた後、足し合わせて全体の来遊資源量の予測結果とした。

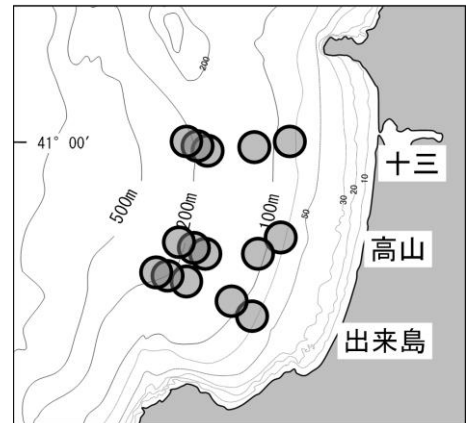


図1. 未成魚分布調査地点

(2) 初漁日予測

新深浦町漁協岩崎支所の日別漁獲量（付表 1）から、同支所においてその年初めての水揚げが記録された日を初漁日と定義し、平成 29 年漁期の初漁日を予測した。初漁日は前年⁵⁾と同様に、過去の初漁日、大潮の暦から予測し、同時に沿岸水温（深浦定地水温）との関係を調べた。

結果と考察

1. 未成魚分布調査

本県沖合において青鵬丸で漁獲したハタハタの、平成 22 年以降の年別年齢別平均分布密度を図 2 に示した。

0 歳魚の分布密度は平成 22 年以降、0.2-35.8 個体/1,000 m²の間で大きく変動し、平成 29 年は 35.8 個体/1,000 m²と 8 カ年中最高となった。1 歳魚の分布密度は平成 22 年以降、2.4-55.5 個体/1,000 m²の間で大きく変動し、平成 29 年は 8.1 個体/1,000 m²と、8 カ年中 6 番目であった（図 2）。

2. 漁獲動向調査

日本海北部系群²⁾を漁獲する 4 県の漁獲量を図 3 に示す。青森県の漁獲量は、平成 20 年の 1,363 トンをピークに平成 24 年まで減少したが、平成 25 年に 796 トンと急増して以降、平成 29 年の 604 トンまで 600-800 トン台の範囲で横ばいであった。また、4 県の漁獲量を前年と比較すると、青森県は前年比 74%、秋田県は 63%、山形県は 79%、新潟県は 74%と、全県で大きく減少した（図 3）。

3. 漁況予測方法の検討と予測の実施

(1) 来遊資源量および年齢構成の推定

平成 12 年-平成 29 年までの雌雄別年齢別漁獲尾数を付表 2 に、平成 22 年-平成 28 年までの未成魚分布調査の 1 歳魚分布密度と資源尾数との関係を図 4 に示す。雄 1 歳魚は、分布密度と資源尾数が有意に回帰し、この関係式から平成 29 年漁期の資源尾数は 10,807 千尾と推定された（図 4）。一方、雌 1 歳魚は、分布密度と資源尾数が有意に回帰しなかったものの、本県においてハタハタ漁獲全体に占める雌 1 歳魚の漁獲割合は小さく（P54-63）、資源全体の推定結果に与える影響は小さいと考えられることから、暫定的に雌 1 歳魚資源量を推定する関係式として使用した。平成 29 年漁期の雌 1 歳魚資源尾数は 4,072 千尾と推定された（図 4）。

VPA（平成 28 年までの全年齢の資源尾数）及び前進法（平成 29 年漁期の 2 歳魚、3 歳以上の全年齢）の結果に、前述の平成 29 年漁期の 1 歳魚資源尾数の推定結果を加えた平成 12 年-平成 29 年の雌雄別年齢別資源尾数を図 5 および付表 3 に、資源尾数に年齢別平均体重を乗じた年齢別資源量を図 6 に示す。年齢別資源尾数

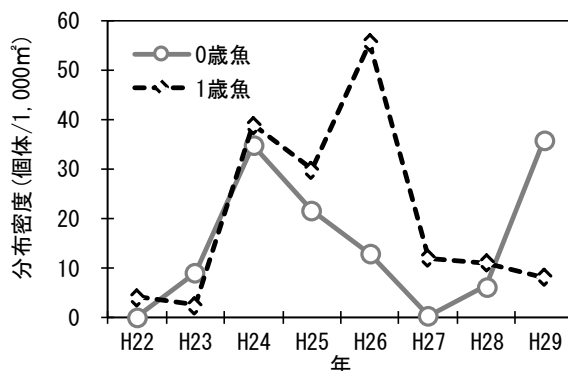


図 2. 青森県沖合における春季ハタハタ 0 歳魚、1 歳魚分布密度の推移

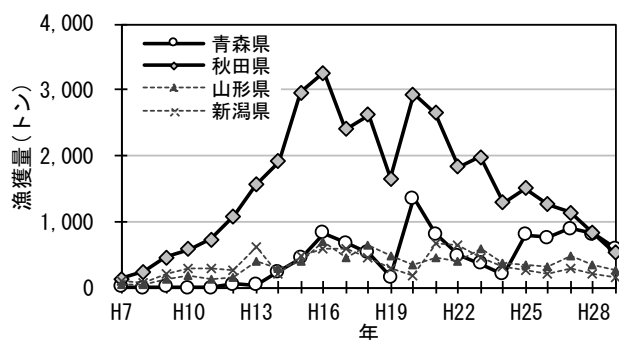


図 3. 日本海北部 4 県のハタハタ漁獲動向

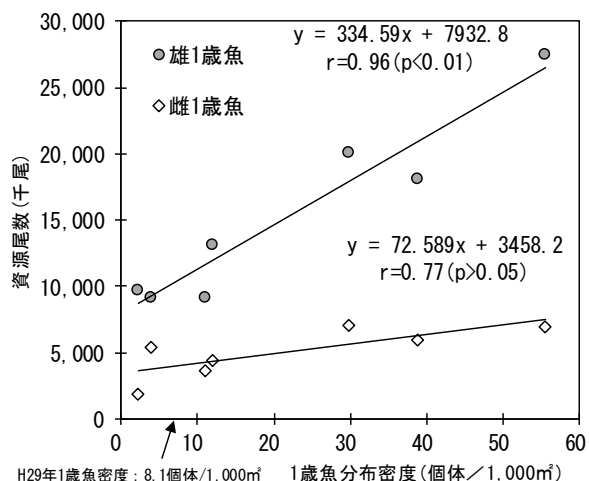


図 4. 1 歳魚分布密度と資源尾数の関係

は平成 12 年以降、雌雄ともに大きく年変動が見られた。平成 29 年の資源尾数は雌雄ともに 1 歳魚、2 歳魚が主体で、雄は 16,594 千尾、雌は 6,715 千尾、合計で 23,310 千尾であった（図 5）。来遊資源量は 1 歳魚 561 トン、2 歳魚 431 トン、3 歳以上 159 トン、合計 1,151 トンで前年比 77%とやや下回り、主体は 1 歳魚、2 歳魚であると予測された（図 6）。

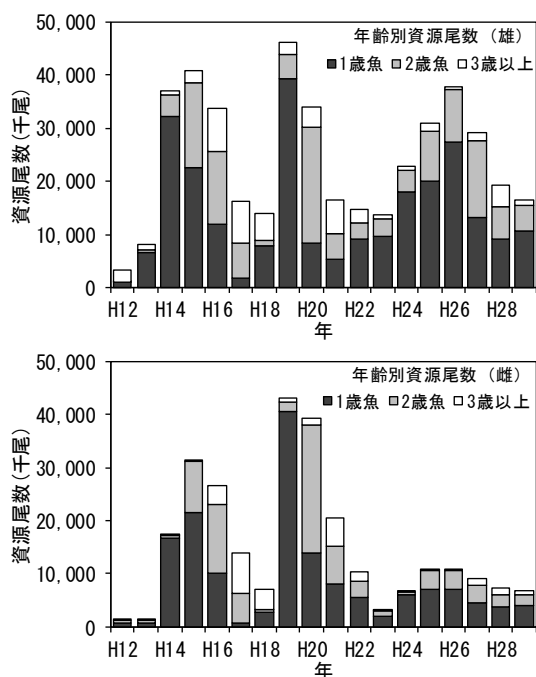


図 5. 青森県におけるハタハタ雌雄別年齢別資源尾数（H29 は前進法による予測値）

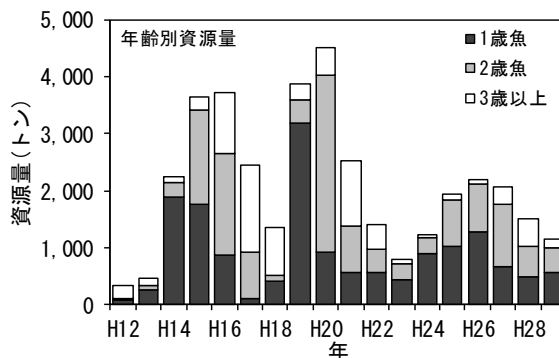


図 6. 青森県におけるハタハタ年齢別資源量

(2) 初漁日予測

これまでの研究結果から、ハタハタの接岸には、沿岸水温と大潮が影響していると考えられる。

平成 24 年-平成 29 年の 11 月-12 月における深浦沿岸定地水温および平成 24 年-平成 28 年の 5 ヶ年平均水温の推移を図 7 に、平成 10 年以降の初漁日における沿岸水温を表 1 に、大潮の初日（水温が 14℃未満に低下した後の最初の大潮）と初漁日との関係を図 8 に示した。

初漁日の沿岸水温は、平成 25 年が 13.4℃、平成 26 年が 12.7℃、平成 27 年が 12.5℃、平成 28 年が 12.4℃、平成 29 年が 11.9℃であり、平成 10 年以降の初漁日の沿岸水温は 10.8℃-14.5℃の範囲で平均 13.3℃であった。近年の初漁日の沿岸水温は、平成 19 年及び平成 24 年を除き 14℃未満であり（表 1）、本県沿岸にハタハタが接岸するための条件として、沿岸水温が 14℃未満に低下する必要があると考えられる。平成 29 年 11 月以降の沿岸水温は直近 5 ヶ年中では低めに推移し、11 月 17 日に 14℃を下回った（図 7）。

平成 29 年の初漁日予測にあたって、1 つ目の判断条件である沿岸水温は、予測実施時点（11 月初旬）で例年よりも低めに推移しており、接岸を遅らせる要因とはならないと判断した（図 7）。平成 29 年の初漁日は、もう一方の条件となる大潮の初日と初漁日の関係から、12 月 4 日（±1 日）と推定した（図 8）。

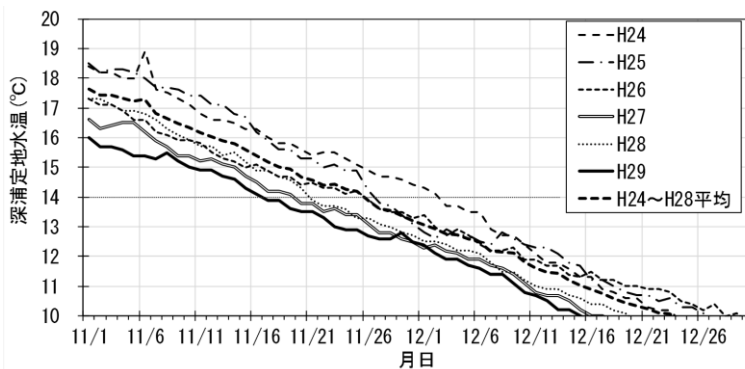


図 7. 11 月-12 月の深浦沿岸定地水温の推移

表 1. 初漁日の沿岸水温

初漁日	初漁日水温	初漁日	初漁日水温
H10.12.10	13.6°C	H20.12.1	13.9°C
H11.12.15	13.5°C	H21.12.5	13.2°C
H12.12.10	13.2°C	H22.12.6	13.4°C
H13.12.10	13.7°C	H23.12.13	10.8°C
H14.11.28	13.4°C	H24.12.13	14.3°C
H15.12.8	13.9°C	H25.12.2	13.4°C
H16.11.29	13.7°C	H26.12.5	12.7°C
H17.12.2	13.6°C	H27.11.30	12.5°C
H18.12.5	13.4°C	H28.11.30	12.4°C
H19.11.29	14.5°C	H29.12.3	11.9°C
		H10~H29平均	13.3°C

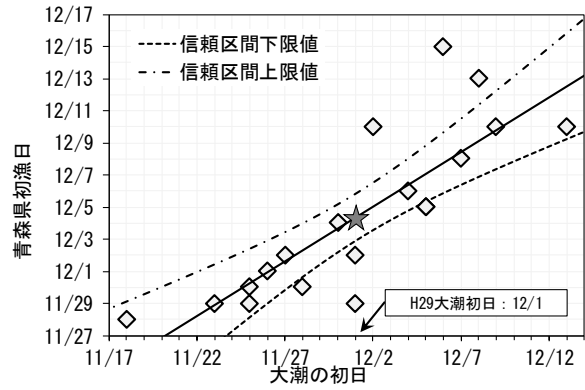


図 8. 大潮の初日とハタハタ初漁日の関係

4. 予測結果の検証

平成 29 年の青森県日本海側におけるハタハタ漁獲量は 604 トンで、前年比 74% であった (図 3)。漁獲物の年齢構成は、雌雄別体長別漁獲尾数から、雄は 135 mm、雌は 150 mm の 1 歳魚が主体となっていた (図 9)。推定した資源量、実際の漁獲量は共に前年を下回っており、また、年齢は資源、漁獲物共に 1 歳魚が最も多かった。推定した資源量に占める 1 歳魚の割合は 49%、漁獲尾数に占める 1 歳魚の割合は 82% と異なったものの、主体となる年齢は推定出来ていた。以上より、資源量推定結果を用いることにより、実際の漁況を十分な精度で予測可能であると判断され、漁況予測手法としての有効性が示された。

平成 29 年漁期の初漁日は 12 月 3 日と予測どおりであった (付表 1)。

今後も引き続き、漁期直前の水温状況や周辺県の漁況情報を収集し、必要に応じて予測結果の修正を行い、漁業関係者に情報提供する必要がある。

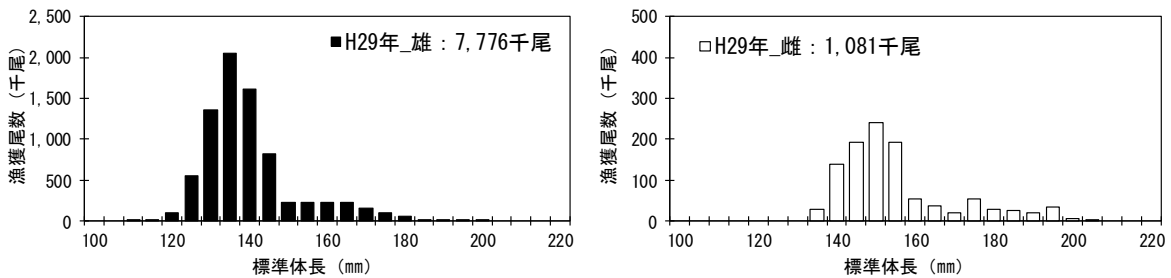


図 9. 平成 29 年漁期における漁獲物の体長組成 (左: 雄、右: 雌)

文 献

- 1) 北川大二・服部 努・斉藤憲治・今村 央・野澤清志 (1997) 1996 年の底魚資源量調査結果. 東北底魚研究, 17, 79-96.
- 2) 水産庁 (2018) 平成 29 年度ハタハタ日本海北部系群の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価 (平成 29 年度), 1508-1526.
- 3) 平松一彦 (2001) VPA (Virtual Population Analysis). 「平成 12 年度資源評価体制確立推進事業報告書—資源解析手法教科書—」 社団法人日本水産資源保護協会, 東京, 104-128.
- 4) 田中昌一 (1960) 水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理. 東海区水産研究所研究報告, 28, 1-200.
- 5) 三浦太智 (2018) ハタハタ漁況予測の手法開発 平成 28 年度青森県産業技術センター水産総合研究所事業報告, 1-6.

